

二〇二一年度

上宮学園中学校入学考査問題（二次適性検査型）

国語

（注意）

- （1）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （2）問題は「一」から「二」まであります。試験時間は五十分です。
- （3）解答用紙は別に一枚あります。
- （4）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （5）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは毎日のように牛や豚、鶏肉を食べています。いっぽうで、犬や猫は食べません。この違いはなんなのでしょうか？
「食べない」のには、大きく分けて2つの理由があるでしょう。

それは、

1. よいものだから食べない
 2. よくないものだから食べない
- の2つ。

前者で言えば、たとえばヒンズー教では牛はとても神聖な存在。ですから、ヒンズー教徒は牛肉を口にすることはありませんし、街中を歩く野良牛もじゃけんにされません。

A 犬や猫などの「ペット」を食べない心理も、こちらの理由に入るのでしよう。仲間であり家族である動物を、殺して食べるなんてかわいそう、というわけです。

しかし、中国や韓国では犬食文化がありますし、日本でも江戸時代までは犬肉を食べていたといいますが（現在でも犬肉を出すお店が国内にあるので、法的に禁じられているわけではありません）。

また、「かわいい」⇔「食べない」というとそうでもなくて、村をあげてかわいがっていた豚を、祭りの際にはあっさりとして食べる文化や、殺してまでは食べないけれど、老衰などで死んだら喜んで食べるという地域もあります。

さて、もう1つの理由が「よくないものだから食べない」という心理。イスラム教とユダヤ教においては、豚は不浄のものとして忌避されています。ですから信者たちは豚肉を食べることがありません。

① 同ヨウに、多くの昆虫やクモ、蛇やトカゲ、ネズミなども人間から疎まれることの多い存在。進んで口に入れようとする人は少ないでしょう。

ですが、日本でもイナゴの佃煮が食されるように、昆虫を食べる食文化は珍しくありませんし、多くの昆虫の栄養力は動物の肉と同じか、それ以上に高いものとなっています。

そもそも人間は、自分とかけ離れた姿や動きをする動物には愛着を持ちにくいという分析もあります。

自分と違うもの、遠い存在は気持ち悪くて食べる気が起きないし、自分と似たもの、近い存在は、これはこれで食べられない。そういうわけなのです。

当然、その感覚は極めて主観的であいまいなもの。時代によっても変わってきます。

江戸時代ではマグロの大トロは「注猫も跨ぐ」と言われていました。当時は赤身がとても好まれていたっぽうで、すぐに腐てしまう大トロは誰も食べなかったのです。最近ではミドリムシがキユウ極の栄養源として注目され、商品化されていますよね。ちなみに、「宗教上」のひと言で片づけられがちな食の（ D ）も、ルーツをたどっていくとちゃんと理由があります。

ヒンズー教が牛を神聖なものとしたのは、「そのころインドで勢力を拡大していた仏教が、生き物を大切にすることを教えたので、それに対抗するため」という説や、ユダヤ教が豚を不浄のものとしたのは、「中東の環境で飼育するには手間ひまがかかりすぎる（家畜として割に合わない）から」という説などがあります。

さらには、牛や豚は食肉用に品種改良されているので、より安全でおいしい肉が大量に得られるけれど、犬猫はいまのところそういった改良・流通がなされていないだけだ、という説明もできるでしょう。

そうやって頭で理解しても結局、肉食・家畜食は「身近な生き物の命を奪い」「自分の体に取り込む」という行為なので「ダメなものダメ」と感情的になっちゃいます。

自分の（ E ）を無理に越える必要はありませんが、違う相手への攻撃につながってしまうのは考えもの。「食は文化なり」という言葉があるとおり、国・地域・民族にはそれぞれの歴史があり、食習慣にはそれらが色濃く反映されています。それを頭ごなしに否定するのは、その国のアイデンティティーを否定するのと同じですから、避けたいところ。

食べ慣れないものを常食する国があったとしても、冷静に「へえ」「どうして？」と聞く耳を持つようにしたいものです。

B

注 不浄……けがれている。

忌避……嫌ってさける。

猫も跨ぐ……魚が好きで猫でも食べずにまたいで通る(ほど味が悪い)。

アイデンティティー……自分が自分であることや、その根拠こんきよ。自分らしさ。

問1 —— 線部①②③はどのような漢字を使って書きますか。 —— 線部と同じ漢字を使うものを、次のア～ウの中からそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

① ア 皆みな一ヨウにうなずいた。 イ ヨウ風の家具を買う。 ウ 解くのはヨウ易だった。

② ア 相手を美カみかしてしまう。 イ 内カでお薬をもらう。 ウ カ値のある人生を送る。

③ ア キュウ付金を受け取る。 イ 真理を追キュウする。 ウ 彼の性キュウさにとまどう。

問2 —— 線部A「犬や猫などの『ペット』を食べない心理も、こちらの理由に入る」とありますが、犬や猫を食べない理由と

して、「こちらの理由」以外にどのようなことが挙げられていますか。本文中の語句を用いて四十文字以内で答えなさい。

問3 B に入る言葉として適切なものを本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問4 —— 線部C「主観」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問5 本文中の(D)・(E)に入る最も適切な言葉を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ネガティブ イ バリア ウ シンボル エ ハードル オ タブー

問6 この文章では「食習慣」における国・地域・民族の常識の違いについて述べられています。では、このように、自分にとって当たり前だが自分以外の人にとって当たり前でなかった体験をしたときにとどのような態度でいるべきですか。本文の内容をふまえた上で、また、本文に挙げられた例以外の具体例を入れて、**八十字以上百字以内**で書きなさい。ただし、次の「きまり」にしたがって書くこととします。

「きまり」

- ・ 題名は書かず、最初のマスから書き始めなさい。
- ・ 段落は変えず、一段落でまとめなさい。
- ・ 句読点なども一字に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本にはじめてのパンダが上野動物園にやってきてまもなく、ぼくも見にいった。その昔、小学校のころ、学生版動物図鑑とやらに「イロワケグマ」として載っていたこの動物を、一目見てみたかったからである。

長い行列に並んで、やっとガラスごしにパンダの素顔すがおが見えたとき、人々はいっせいに「かわいいーっ」と叫んだ。

ほんとにパンダはかわいかった。顔もしくさも座りかたも、なんともいえぬかわいらしさだった。その後ずっと、ぼくはパンダとはかわいい動物だと思っていた。なんでこんなにかわいい動物ができたのか、とてもふしぎだった。

京都大学に移って二年目だったろうか、当時大学院生の新妻昭夫君にいづまあきおが、ふと、「パンダの目つきってどうしてあんなに悪いんでしょうね？」といった。

「え、ほんと？ ぼくはぜんぜん気がつかなかった」「目のまわりが黒くてかわいらしく見えるけど、よく見ると、目そのものはじつにいやらしいですよ」

さっそくいろいろな本でパンダの顔の大うつしを見てみると、新妻君のいうとおりである。どうやらパンダはそのいやらしい目つきを、黒いふちどりで隠かくしているようなのだ。

それでも世界じゅうでパンダはかわいい動物ということになっている。たしかに美しくてかわいい動物である。けれど自然の中で生きていくためには、かわいいばかりではいられないのである。

これもまた昔のこと、注旧ソ連の小学校用動物学の教科書を見て、いささか驚おどろいた。キツネとかクマとか、いろいろな動物が絵入りで説明されている、いわゆる博物学的な本だったが、クマやオオカミはいいとして、リスとウサギの絵を見てびっくりした。

日本でリスとかウサギといえは、典型的な「かわいい」動物である。どんな絵を見ても、思わず撫なでたり抱だきあげたりしたくなるほどかわいらしく描えがかれている。

ところがソ連の教科書はまるでちがっていた。草むらの中に座っているノウサギも、木の枝の上を走っているリスも、じつに

たくましい。その顔はかわいいという感じではまったくくない。撫でようとして手など出そうものなら、いきなりガブッと咬みつかれそうなのである。

けれどぼくはすぐ納得した。これがヨーロッパと日本の文化のちがいのかもしれない。

ヨーロッパ文化では、野生の動物はすべて野獣である。人間と同じく、自然と闘いながら懸命に生きているのだ。人間も彼らの敵だ。うっかり近づけば、彼らは自分の身を守るべく攻撃してくるだろう。そうでなければ、彼らは生きていけないのだ。ヨーロッパ人がかわいいがるのはペットである。ペットは人間がかわいいがるために作り出したものだ。これはあくまでかわいいがってよい。いや、かわいいがってやらねばならない。もしかわいがってやらなかったら、人道に反する。

ヨーロッパの動物観には、キリスト教的といおうか、狩猟民族的といおうか、何かこのようになおいがある。

日本の文化ではまったくちがう。野生動物であろうと何だろうと、みんなかわいい存在になってしまふ。タヌキは信楽焼の酒徳利を下げたユーモラスな姿になってしまふし、キツネは明神様の入口におとなしく座っている。さわったら咬みつかれそうだという雰囲気などさらさらない。

山の中の道路には、「動物に注意」の標識がある。ヨーロッパのそれは、野生そのままの動物の姿が描いてある。牛に注意という場合でも、牛はけものらしく堂々とした姿である。

ところが日本ではちがう。「サルに注意」という標識には、母ザルが子ザルの手をひいて歩いている絵が描かれている。沖縄のホテルでよく目にする「ハブに注意」の標識ですら、何ともかわいらしいハブがちよろつとぐるを巻いた絵だ。

もちろん現実はそのものではない。だれもが知っているとおりに、サルは人間に危害を加えることがあるし、ハブはそれこそ命取りである。けれど標識にはそのことは示されていない。むしろわざわざかわいらしく描かれているようにさえ思われる。

ヨーロッパの標識にある動物は、すべて車の敵なのだ。「轢いてしまったらかわいそう」というのではなく、「そんな動物にぶつかったら車がこわれる、転倒する」という危険な存在なのである。

(日高 敏隆「動物の言い分 人間の言い分」による)

注 新妻昭夫……（一九四九年〜二〇一〇年）日本の動物学者。

旧ソ連……一九二二年から一九九一年まで存在した国家「ソビエト社会主義共和国連邦」のこと。

信楽焼の酒徳利……滋賀県の信楽を中心に作られる陶器とうきで、細長くて口が狭いせま、酒を入れるための容器。

明神様……神様の呼び名。ここでは神様をまつている場所のこと。

問1 線部「ヨーロッパと日本の文化のちがい」とありますが、本文に挙げられている日本文化の動物観を示す具体例を四つ探し、それぞれ簡単に答えなさい。

問2 ヨーロッパ人にとっての「野生動物」とはどのような存在ですか。「日本人」「ヨーロッパ人」という語を用い、本文の語句を用いて**八十字以内**で答えなさい。ただし、次の「きまり」にしたがって書くこととします。

〔きまり〕

・ 題名は書かず、最初のマスから書き始めなさい。

・ 段落は変えず、一段落でまとめなさい。

・ 句読点なども一字に数えます。